



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Cultural Transmission and convergence processes in Paleolithic of Northern Asia and Beringia : On the basis of microblade industries
Author(s)	ウラノブ, アレキサンダー
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16964号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99808
Type	doctoral thesis
File Information	Aleksandr_Ulanov_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術） 氏名： ULANOV Aleksandr

主査 教授 加藤 博文
審査委員 副査 准教授 蓑島 栄紀
副査 准教授 夏木 大吾

学位論文題名

Cultural Transmission and Convergence Process in Paleolithic of Northeastern Asia and Beringia:
On the basis of microblade industries.

（北東アジアとベーリングシアの旧石器時代の文化伝播と文化収斂過程：細石刃石器群に基づいて）

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、北海道島、朝鮮半島、中国東北部、東シベリア地域の後期旧石器時代の細石刃石器群を分析対象として、個々の石器群を直接観察し、検討することにより、細石刃製作技術の技術情報の伝達に文化的伝達（cultural transmission）と文化的収斂（cultural convergence）が認められることを指摘し、細石刃技術の地域的拡散と技術伝承のメカニズムを考察したものである。

細石刃とは、通常、長さが 50mm 未満、幅が 5-10mm の平行する側縁を持つ小型の石器であり、骨角製や木製のシャフトに埋め込まれて槍やナイフなどの刃部として使用されたと想定されている石器である。石器の小型化については、初期人類集団の技術革新の指標として解剖学的現代人に特有の行動様式と関係する高い移動性と計画性を反映した技術・行動的变化と理解されている。とりわけシベリアから北米にかけての環北太平洋地域では、後期旧石器時代後半期に広範囲に細石刃製作と関係する考古遺跡が確認されており、その背景に人類集団の移動と拡散の動きがあると推定され、多くの研究者の関心を集めてきた。

細石刃技術の研究は 19 世紀末以来の約 100 年の歴史があり、それぞれロシア語圏、英語圏、中国語圏、ハングル語圏、日本語圏において数多くの研究が蓄積されてきた。また国境を超えたグローバルな研究課題として、国際的な関心も集めてきた。近年では古代 DNA の研究成果と重ねて、集団系統史の視点からも注目されている考古資料である。

細石刃研究は、地域言語の多様性から、情報共有の難しさも指摘されてきた。とりわけ、資料観察や分析、記述において研究言語の多様性は、時に資料解釈の誤認や解釈のずれなどを引き起こす要因ともなってきた。石器の小型化は、人類集団の行動様式と大きく関係し、環境適応行動や、石器素材となる石材の地域的偏在、移動性の高さなど複数の要因によって引き起こされるものであり、必ずしも特定の地で出現した技術革新が周辺に拡散するだけでなく、偶発的に独立して多能的に発生する可能性も否定できない。その中で北東アジア地域からベーリングシアにかけて時間的に限定された時期に出現し、拡散した両面加工石器を素材として複雑な製作工程を踏んで細石刃を製作する手法については、同一の技術情報が個人レベルから集団レベルで共有され、伝承された結果であると推定されてきている。

本論文では、北東アジアに共通して確認できる二つの細石刃製作の方式に着目し、それぞれ「湧別方式」と「峠下方式」と呼称される異なる細石刃製作技術の特徴を実際の資料観察を通じて、使用痕分析、細石刃剥離に際して残される痕跡パターンの観察、接合研究に基づく細石刃核の整形と細石刃製作過程の分析によって説明している。その上で、実際に直接資料観察を行った東シベリアの 2 遺跡、中国東北部の 2 遺跡、朝鮮半島の 2 遺跡、北海道島の 2 遺跡からの出土資料に基づいて、二つの細石刃製作技術の違いの背景に技術情報の文化的伝達と文化的収斂の二つの様相が認められることを明らかにした。限定された遺跡の資料を対象としているとはいえ、異なる地域言語で記載され、解釈されてきた広域の資料を、統一した観察手法と観点から分析し、考察して比較研究した点は、独自の着眼点と手法を持った研究として評価することができる。

複雑な国際情勢に翻弄され、しばしば情報や基礎資料の共有が難しい当該地域において、国境を

超えた広域の考古現象を対象とした比較研究は、容易ではない。必ずしも正確な情報が共有されていない東シベリア地域の細石刃石器群の実証的研究を基礎に、技術的多様性と研究の蓄積が厚い北海道島の研究資料の検討を加えて、中国東北部や朝鮮半島の出土資料との比較を行った本研究の意義は大きい。

学位授与に関する委員会の所見

審査委員会では、本論文の多地域にまたがる資料を実際の資料観察と分析を通じて考察した独創性と新規性について高い評価がなされた。一方で、(1)分析対象として抽出された遺跡については、資料数が限られており、地域的多様性を検討する上では十分にその多様性を反映できていない可能性があること、(2)資料へのアクセスについての制限があるにせよ、ベーリング海峡地域の資料が分析対象となっておらず、分析が不十分であること、(3)本論文で指摘されている文化的伝達と文化的収斂の二つの現象が時間的に異なる期間で発生していることについて、その相関関係を十分に説明できていないことなどの不足点が指摘された。口頭試問においては、これらの指摘のいずれに対しても、学位申請者から応答及び補足説明があった。その他の疑問点についても、本論文の学術論文としての価値を本質的に損なうものではないと、本委員会では判断した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、学位申請者に博士（学術）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。